

江の島源倉紀行全



江之島簿念記

藤浪氏藏

相列に北嶋鐘余瑞を伴んと本出取ひ侍りし侍と云々  
まゝ年のいとゆゑお祭ふ人羅きニ申すつゝりゝ色もあつゝふふ  
さら有りて卯月も此日思ふもちのゆゑりこをり  
し法おつれて旅立ぬ氏乃業浦と云ふ所を通るおひ  
おひおひ一何焼ゆゝゝとや又明の夜宗祇法作四圍の  
おろゝやゑ思ふより一保北懸をりそまゝありとあり  
とらん今もとゝ一お徳右跡ルなまきとは染候と云  
舟濃村通ふさぬといおうゝとつとゝる磯辺にお有り  
とや今い田面と云ふぬ家長朝臣と云ふ流乃何々ぬ  
崎のせぬ松と縁一結ひ一而ありと云々

松ありて誰かむい候と云々





本寺の鳥居北ニテ一ノ雲小つら引たる者小人家有りて  
旅客残るむ岩中陀と云ふ小屋ありしやあり一の道いと  
ゆあふルして仰湯列と云ふをあれはけきとわされ而  
休之仰りぬゆれも十七百つちのれ已なりあれを女流の  
ままに記志ふとけしきもさきわ列とゆきくくそ無成と  
小流ふて仰りルら二の意居を越へて主門堂塔ソうとをら  
魚しそふ記するそをり耶ー先下のやよりよふゆふ  
指ふその山を金電山と云りりかち雨やして元ル時や  
ありあれを指志乃かけ道をほむゆゆとの演習なりを  
らる。岩はさかりてたぬらうとゆつら成んわと志はふ  
らふしすきてそらゆえにむらうと磯打浪はた  
たけ仲じ松をふ入くうううふ夜不兎劇と云るあり  
むういゆ余要此里小兎のあり一小建長寺僧と人志まの  
悲ひ道らふるそとゆらる浦波のあいのめまけきみとあ  
きしそらう恨みとくは利ゆあり身成をけしより兎と書  
としやあ人の語りありれと

中赤土社ともゆき遠近世々

まえり磯辺乃彼忠ありれ

又龍穴と云ふ宮名有りいそ和是一と云ふんと松こらして  
入あれもしそをらうしてつれと記お名屋を傳ひてなを  
志川ふもせらま川とけちてゆらるゆらるゆらるゆらる  
見傳りありてあやききるゆらる石の仏像精くしそせ







浪吉此本有りいふ志へ公曉河圖梨のは本法示隠れ念て  
鎌倉のお府公儀うらゝとふ人誰か本たちとのありてを

歳霜と幸をぬき本のものと

かき一人そ名のとあせぬ

下や着矣推現乃社と語して作りぬ此秘教の秘り法染法  
津有し雨と名や又よりまありせし小靈佛具社教く有り共  
中亦女てま本像なりしゆりて母所勝母古化隠懸とてお  
一むいむい小松殿の秘教して持結ひ一理懸るより

いあ志ふこまこまのつとえよりの結の

志る屋ふかき松丸とくか

かくて目と雨山赤のむきりぬて雪の下とてふ前小屋よりあ

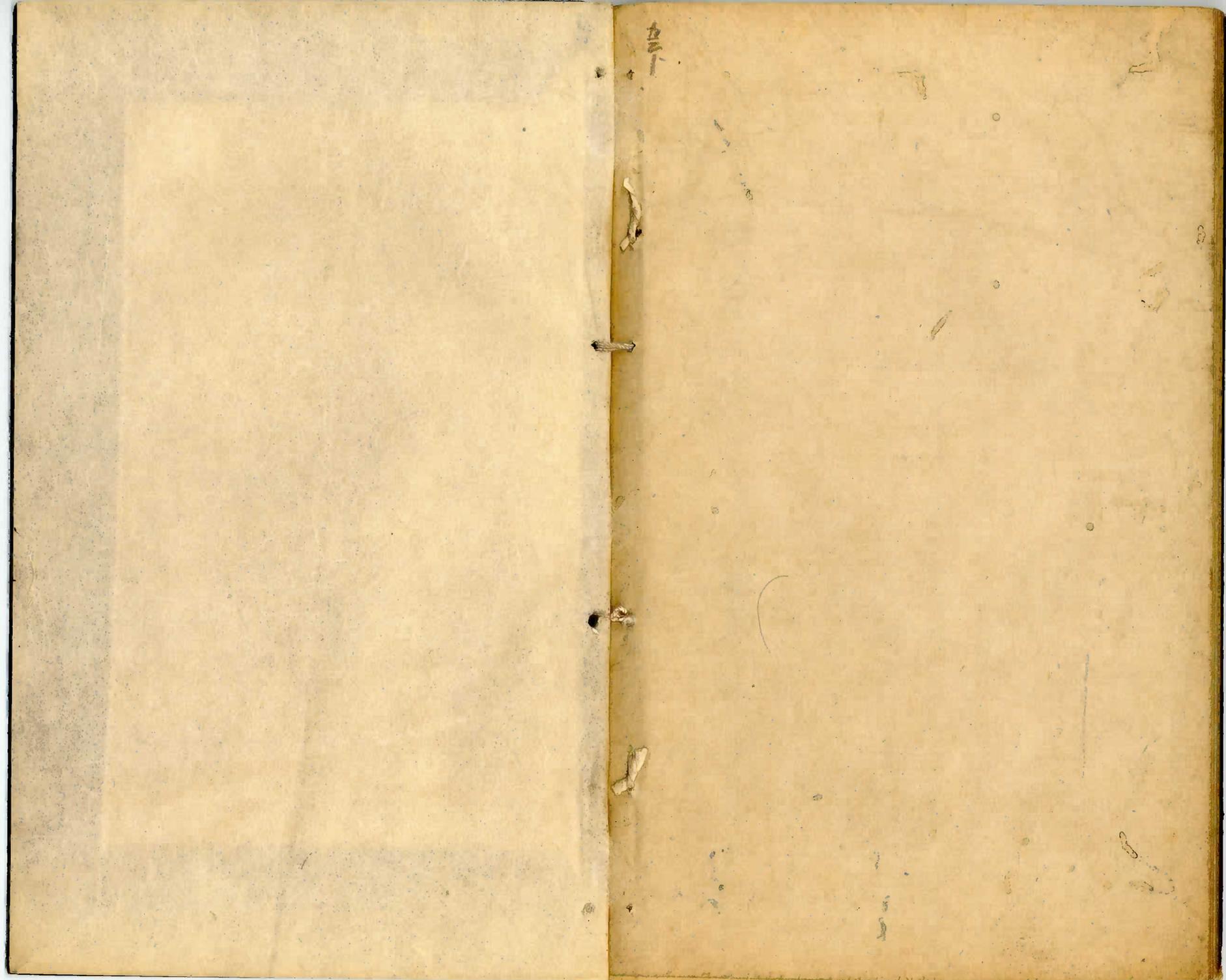
の教此のあまききつた乃これと又くさくされてぬかりぬれと  
こころを起しぬあつとれと強乃やとつとて作ると

遠くは遠里此の秘教もあつと

むとひとそぬみかまのゆめ

鎌倉此那りと廣くあるをて日ぬひ遠きりていん  
かく作りしむきは申ふと名をさおと見ゆくと上と浦北  
在重臣(ま)のりてまふまへ一ハ此京とてはゆりくああい  
乃とのふみゆれしとより金匠(い)道の社二里も余り作りぬれ  
すし志るとるありぬきいしちあつとみしてはゆみりてあを  
け作りしとるありぬれしハ此京とてはゆりくああい  
いふ中も世とあひまゆりぬみり此の方(い)ゆてあつと





三下

